

2015年1月25日

## 博士論文審査要旨

申請者：孫 曉英（早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程4年）

論文題目：戦後日中教育文化交流史に関する教育学的研究—大平学校の事例を中心に—

申請学位：博士（教育学）

主査：早稲田大学 教育・総合科学学術院 教授 博士（教育学） 小林敦子

副査：早稲田大学 教育・総合科学学術院 教授 長島啓記

副査：早稲田大学 大学院日本語教育研究科 教授 博士（応用言語学） 宮崎里司

副査：国立教育政策研究所国際研究・協力部総括研究官 教育学修士 一見真理子

### 1. 本論文の目的

本論文の目的は、日中両国間の国交回復から現在に至るまでの日中教育文化交流事業における日本語教育を、教育学の観点から検討することにある。とりわけ、文化大革命後、中国の「改革開放」路線の中で、「在中華人民共和国日本語研修センター」（通称「大平学校」、1980年設立）を拠点に展開された日本語教師教育の実践が、日中両国間の教育文化交流に与えた影響とその意義を究明している。

大平学校は、文革直後の大平正芳首相（当時）の訪中（1979年）をきっかけとして誕生し、ODA政府開発援助という形で、中国の大学の現職日本語教師120名に対して1年間の日本語教育に関する集中研修を行い、これを5ヵ年継続することにより計600名の教員の再教育を行った教育機関である。大平学校には、金田一春彦を始め、日本を代表する著名な国語国文学・日本語教育関係の研究者が相次いで赴任し授業を行った。

その結果、中国の日本語教育は改革され、大学における日本語教育のレベルが向上した。このため大平学校の設立は、中国の日本語教育にとって重要な転換点となった。また大平学校は、多数の日中教育文化交流のアクターを育て、彼らは現在に至るまで30年以上にわたり日中教育文化交流事業を支え、日中関係の改善にも大きく貢献した。

しかしながら、大平学校に関しては、従来、体系的な研究がなされてこなかった。本研

究においては、大平学校の全貌について、第 1 次資料を発掘・収集した上で明らかにし、大平学校での人的な教育交流や異文化間の教育実践が、その後の日中関係にもたらした影響について、教育学的な観点から解明することを意図している。

さらに本研究は、人間の一生にとっての言語教育の意味、つまり言語（外国語）学習がその時代の影響を受けながら、学習者の人生とどうつながるのか、言語を学ぶことが学習者の人生をいかに変えたのかも合わせて検証することを目的としている。

そのため、本研究では、インタビューの手法を採用し、大平学校に赴任した日本人講師、同校で学んだ中国人研修生と関係者合計 49 人との信頼関係の構築の上に、ライフストーリーの聞き取り調査を行った。そして、社会環境と個々人の意識変容についてマクロとミクロの二つの視点から分析し、時代背景と個人の人生の織りなす諸相を描き出している。

このように、本論文は、近代における日中の教育文化交流の歴史を踏まえながら、大平学校の実践が 1972 年の日中国交回復以後の約 40 年にわたる日中関係に与えた影響を検証するとともに、外国語学習を通じての異文化間交流が個々人の人生に与えた教育的意味を解き明かすことを課題として設定している。

## 2. 本論文の構成

本研究は、まず第 1 章において中国における言語教育（言語教育政策、外国語教育、日本語教育）の歴史的変遷について概観している。その上で、第 2 章、第 3 章において大平学校の設立経緯、教育実践を具体的に検証する。さらに第 4 章、第 5 章では、視点を人々の内的な世界や人生（ライフコース）へと移すことで、大平学校の教育実践の持った意義の本質に迫り、結論では、全体のまとめと総合的な考察を行っている。

また最後に補論として、大平学校で養成された日本語教員たちが育てた学生・院生の活動の事例として、日本の東京都荒川区における中国人留学生による在日中国人児童の教育支援活動を収録している。この活動は大平学校とは直接の関係はないものの、大平学校の発展形態としての民間教育文化交流の取り組みと考えることができよう。

本論文は、以下の各章各節から構成されている。

### 序 論

第 1 節 課題設定

第 2 節 本研究の研究視角

第 3 節 先行研究と本研究の意義

第4節 研究方法

第5節 本研究の構成

## 本 論

### 第1章 中国における言語教育の歴史の変遷

第1節 言語教育政策に関する研究

第2節 外国語教育の歴史の変遷

第3節 日本語教育の変遷

### 第2章 大平学校の設立経緯

第1節 日中教育文化交流の歴史

第2節 大平学校以前の中国における日本語教育の実態

第3節 戦後日本の日本語普及活動の展開

第4節 大平正芳と日中交流

### 第3章 大平学校の教育実践

第1節 大平学校の開校準備

第2節 大平学校の教育実践

第3節 訪日研修

### 第4章 大平学校の日本人講師とその諸相

第1節 大平学校に至るまで

第2節 中国での異文化体験

第3節 日本人教師にとっての大平学校の教育的意義

### 第5章 大平学校と研修生たちのその後

第1節 中国における日本語教育の質的な変化

第2節 日本で活躍している大平学校の研修生たち

第3節 大平学校の特質とその意義

## 結 論

第1節 各章のまとめ

第2節 全体の考察

第3節 今後の外国語教育に関する提言

第4節 今後の研究課題

## 補 論

留学生による在日中国人児童の支援活動

—大平学校「孫世代」のケーススタディから—

第 1 節 留学生による在日中国人児童生徒の社会適応支援事業

第 2 節 荒川区の小学校における中国人児童の実態

第 3 節 在日中国人児童の支援活動における留学生の役割

## 3. 各章での考察の概要

### 序 論

序論では、本研究の社会背景及び問題の所在について述べている。そして、①日中 100 年の交流史を踏まえて、日中国交回復以降の日本語教育が日中教育文化交流に与えた影響について大平学校を中心として分析すること、②大平学校での実践を異文化間教育としてとらえ、教師と学習者双方の自己変容に着目し分析すること、③外国語教育という言語教育が個人の人生に与える影響を考察すること、④生涯学習としての言語教育の意味を明らかにすること、以上 4 点の研究視角について説明した。

また先行研究を整理しながら、先行研究の蓄積が少ないことを指摘し、大平学校については全貌が明らかにされていないため、第一次資料を発掘しながら実証的に論を進める必要性のあることについて言及している。さらに個々人の生涯に与える外国語教育の影響を考察し、生涯学習の視点から言語と人生を究明するために、インタビューという手法を用いライフストーリーに依拠しながら論じる本研究の方法論について述べている。

### 第 1 章 中国における言語教育の歴史の変遷

本論部分の第 1 章では、中国における言語教育の歴史について概観・整理することによって、大平学校誕生の土台となる中国における言語（外国語）教育の問題点を明らかにしている。

まず、中国における言語教育政策に関する先行研究を概説した上で、外国語教育の歴史の変遷について論じた。とりわけ中華人民共和国成立後のロシア語教育一辺倒から、文革中における鎖国状態、改革開放期における資本主義諸国への関心の高まりと外国語学習熱などが、検証されている。

さらに、中国における日本語教育の歴史を戦前期と中華人民共和国建国後に分けて論じ、

前者については台湾・「満洲」・中国大陸に分けて記述、後者については1949年から70年代にかけての時期（第1期）、1978年の改革開放政策開始から90年代前半までの時期（第2期）、90年代後半から21世紀の現在に至る時期（第3期）に分けて考察した。

## 第2章 大平学校の設立経緯

第2章は、1980年代における日中両国政府の協力による中国での日本語教育及び日中交流の展開に関して、その社会的背景を検討し、大平学校の設立の経緯を明らかにしている。第1節では、大平学校の前史となる日中教育文化交流史について概観し、第2節では日本語教育に焦点を当て、大平学校の設立以前（文革期）の中国における日本語教育の実態について考察されている。第3節では、国際交流基金の日本語普及活動や大平学校の出発点となる日本語巡回指導について論じた。第4節では、大平正芳内閣期の日中協力の背景について論述し、大平正芳の戦時下の経歴が大平学校設置につながる経緯についても検証している。

その結果、大平学校の設立の背景・経緯として、以下の4点を著者は指摘する。

①中国における外国語教育の必要性、②日本側が諸外国における日本語普及の一翼として、大平学校の設立に可能性を見出したこと、③日本の国際交流基金による中国での日本語巡回指導の実施が、日中の日本語教育界の接触を実現させ、大平学校成立の道を開いたこと、④大平正芳の日本軍占領下の中国における官僚としての経験が、戦後の彼の外交戦略に影響を与えたこと、である。こうした経緯によって、日中双方のニーズに合致した大平学校が誕生し、国家の教育文化政策として事業が積極的に進められたことを解明している。

## 第3章 大平学校の教育実践

第3章では、大平学校の教育の実態を教育内容・教授法・教材・試験・研究意識に焦点を当て、外務省、国際交流基金の内部資料、大平学校に赴任した教師側の所蔵資料、当時使用していた教科書、研修を受けた中国人教師が保存していた第一次資料を発掘しながら、実証的に分析している。さらに異文化間教育の要素（相互作用・訪日研修・日中相互のパイプ役）について分析し、大平学校での研修と訪日研修の影響及び役割を明らかにしようとした。

大平学校での研修は、日本語教師の再教育を中心とし、研修生は全国各地の大学や研究

機関から選ばれた。また、日本側は優れた教授陣を派遣し、中国現地の教師・スタッフと互いに協力し合い、教育実践を行っていた。大平学校は日中双方の努力によって実現できたものであることを、本章では論じている。

また、研修生は、1か月の訪日研修を通して、日本という異文化を理解すると同時に自国の問題点に気づき、客観的に両国を見ることができるようになったことが言及されている。

大平学校は、文改革開放初期の中国における日本語教育の発展や両国の学術成果の交流、日本語教師の日本理解の向上にとって重要な役割を果たした。大平学校での経験は、彼ら日本語教師にとって、日本に対する「開眼」と言っても過言ではなかったことを具体的な事例に即して著者は指摘している。

#### 第4章 大平学校の日本人講師とその諸相

第4章では、大平学校にかかわった100名近い日本人学者、関係者について検証し、大平学校赴任以前の経歴や赴任のきっかけ、大平学校での教育実践及び彼らの異文化体験まで踏み込んで記述されている。そして、彼らが研修生に与えた影響、彼らにとっての大平学校の意義、その後の日中教育文化交流にどのような影響を及ぼしたのかなどを考察した。

その結果、大平学校に派遣された日本人教師は、一流の研究者であるとともに教師としても超一流であり、だからこそ大平学校の成功に繋がったことが明らかにされている。

また大平学校で当初意図されていなかったことであるが、日本人若手講師の学びや成長があり、日本人教師の側も、大平学校を通じて、中国観が再構築され、帰国後に、草の根における日中友好活動を支えるアクターとして活躍する例もあったことが検証されていることは注目できる。大平学校での経験やネットワーク形成が日中教育文化交流の道筋を強化し、さらに後日、日本の教育界における国際理解の進展や大学の国際化に好影響をもたらしたことが論じられている。

#### 第5章 大平学校と研修生たちのその後

第5章では、大平学校及び研修生のその後の動向について考察した。そして、大平学校のみならずその後身である北京日本学研究中心も、中国の日本語教育の発展に寄与しているとする。なお、大平学校研修生の個人レベルでは、日本語教育を通じての新しい知識や専門的技術の獲得、日中友好のアクターとしての役割、といった作用が見られることが検証されている。

ちなみに、中国在住グループの語りにおける主な内容は、教授法や研究能力の向上などであり、日本語教育関係の話題が大きな割合を占めていた。それに対して、日本在住の関係者は、大平学校では訪日研修の影響が大きく、日本で自分の人生について考え直し、中国を離れて、日本で新たな人生を始めたこと、その後の日本留学生生活を支えた大平学校時代の日本人講師や仲間たちについての語りが多かったことが、インタビュー調査の結果から導き出されている。

本論文の対象となった大平学校の修了生は現在、日中両国での教育、経済分野で活躍している者が多い。彼らにとって、大平学校で学んだことは名誉であり誇りでもあり、国の代表としての責任を感じている。しかしながら、大平学校は個人の人生にとっても大きな転機であり、大平学校が彼らの青春時代の象徴として輝いていることが、インタビューを通じて、明らかにされている。

## 結論

結論では、各章での考察を踏まえて、大平学校について以下のような結論4点が挙げられている。

### (1) 日中教育文化交流史の成功事例

第1に、大平学校は日中教育文化交流史の中で、極めて成功した事例であり、同校が日中国交回復後40年間の日中関係に大きな役割を果たしたことである。大平学校の成功要因として、1972年の国交回復、1978年の日中平和友好条約の締結といった時代の流れの中で、双方のニーズに合致した教育政策が採られたことが指摘されている。

その上で、著者は、大平学校について以下のような4つの特徴を挙げている。①政府主導下の計画的な実施、②日中政府の協力関係に基づく日本側に全面的に委ねた教育活動、③日本側による一流の教授陣の派遣及び中国側による優秀な研修生の選抜、④綿密かつ集中的な学習プログラム、である。

大平学校の設立は、中国の日本語教育にとって重要な転換点であり、教育方法と内容はこれを機に飛躍的に向上した。大平学校の修了生は、日本語教育のネットワークを形成し、現在に至るまで30年間にわたり中国の日本語教育を支えたばかりか、関係者は日中の教育文化交流事業の中核的役割を果たしてきたことが、本論文では具体的に論じられている。

一方、日本側にとっても大平学校は、海外における日本語教育のかつてない規模での実践の場であった。日本語教育は海外において、その後大きく発展を遂げていくが、大平学

校は日本語教育関係者にとって、日本語教育の海外発展の起爆剤となったことが指摘されている。

## **(2) 外国語教育と個人の人生**

本研究においては、言語教育とりわけ外国語教育が、個人の人生に持つ意義や、大平学校での学習経験が個々人のその後の人生にいかなる影響を与え、ライフコースや人生観を変容させたのかを、インタビュー調査を通じて実証的に明らかにしている。

20世紀の日中関係は、交流から戦争そして国交断絶へ、また国交の回復から正常化へと、大きく変転してきた。日中間の人的交流と言語教育（日本語教育・中国語教育）は、時には促進され、時には困難をきわめた。本研究では、大平学校に集まった人々が時代の政治・政策に翻弄されながらも、外国語を学ぶことで新たな人生を築いた様相が提示されている。大平学校の研修参加者の中には、日本語教員としてレベルをあげ、中国の高等教育機関で活躍した者が多い。また、大平学校をきっかけとして日本に留学し、その後、日中教育文化交流上大きな役割を果たした者も少なくない。外国語教育がこれだけ各人の歩みに大きな意味を持つことを、本論文は多くの事例から解き明かしている。

## **(3) 生涯学習としての言語教育**

大平学校での言語教育（日本語教育、日本語教師教育）は、学校教育終了後の継続教育、すなわち生涯学習としての意味を有していたことを著者は指摘する。大平学校に参加した多くの日本語教員は文革世代であり、大平学校で文革期に機会を逸したキャリア再開が可能となった。ある者にとっては失った人生を取り戻す意義さえも持った。

さらに言えば、日本人教員側の中国での日本語教育や異文化体験も、生涯学習としての意味を持っていた。日本人教師たちは中国人と向き合う中で中国観を改めたり中国語や中国文化を学んだりし、こうした生涯学習経験をもとに帰国後に日中教育文化交流のアクターとして活躍する場合もあった。以上のような事例からは、生涯学習としての言語教育（外国語教育）が持つ意味も検証されている。

## **(4) 学び合う共同体の構築**

大平学校において、学びの共同体が構築されてきたことも重要である。大平学校の日本人講師の中には、親世代が日中戦争への出征・参加経験をもつ者もいた。一方、中国人研修生の中にも祖父母や父母が戦争の被害を受けた者もいた。植民地支配と戦争という史実は次世代に大きな影響を与えていたが、平和への希求という意味では共通した思いが日中双方にあったと著者は論じている。



そして両者の意欲が相互に影響しあい、大平学校は異文化交流の理想的な場となり得ていた。日本語という共通の言語を教え・学ぶこと通じて、大平学校は、異文化間における教師教育の形を新たに作り上げ、多文化共生的な教育の場を作り上げていたこと、研修終了後も大平学校は、関係者同士の緊密なネットワークを保持し、連帯意識が生まれたこと、を本論は検証している。

#### 補論

以上の結論が導かれて本論は終わるが、本研究では「補論」として、大平学校時代から30年後の現在の、大平学校の「孫世代」、すなわち大平学校で教鞭をとった講師を第1世代とするならば、修了生である教え子(第2世代)の、そのまた教え子(第3世代)として日本語を学び日本に留学した中国人留学生の東京都荒川区での「在日中国人児童への教育支援活動」について取り上げ、大平学校の世代を超えた波及効果を検証した。大平学校の孫世代が日本において中国人児童の教育支援を行い、日本の異文化間教育実践を支えていることに、大平学校の実践の深まりと発展を見ることができると、著者は論じている。

#### 4. 総 評

本論文の目的は、1972年の日中の国交回復から現在に至るまでの約40年間に亘る日中文化交流事業における日本語教育を、教育学の観点から検討することにある。対象に選ばれたのは日中国交回復後、中国の「改革開放」路線の中で、通称、大平学校と呼ばれた、「在中華人民共和国日本語研修センター」を拠点に展開された日本語教育・日本語教師再教育の実践である。

本論のデータ分析及び検証を通じて、その目的は、十分に果たされていると考えることができる。以下、本論文の成果を具体的に挙げていきたい。

##### (1) 大平学校の全体像の再構築と実証的な分析

従来、大平学校については、日中教育文化交流史上大きな役割を果たしたことが多々指摘されながらも、体系的な研究がなされてこなかった。その意味で、外務省や国際交流基金、あるいは赴任した教師側や研修を受けた中国人教師が保存していた第1次資料を発掘しながら、大平学校の全貌が本論で究明されたことは、まず大いに評価できる。

また49名におよぶ調査協力者(中国人研修生、日本人講師、外務省関係者、日本人講師の

家族等)へのインタビューの分析結果から、大平学校の特徴について、①政府主導の下での計画的な実施、②日中政府の信頼と協力関係に基づき、日本側に全面的に委ねた教育活動、③日本側による一流の教授陣の提供及び中国側による優秀な学生の選抜、④綿密かつ集中的な交流プログラム、といった明確な結論が導かれている点も同様である。

さらに、大平学校の関係者がその後、日中教育文化交流事業のアクターとして 30 年来活躍してきたことを、豊富なデータから考察し明らかにしている。

大平学校は、日中両国の国家的な教育政策に基づき、誕生した教育機関であるが、国家政策と個人の生き方のダイナミズムを詳細に分析した実証的な研究としても、本論は興味深い。

### **(2) 日中交流の 100 年の歴史を踏まえた検証**

本研究は、日中 100 年の交流史という大きなパースペクティブに立脚した研究として構想されている。近代における日中教育文化交流史を、清末まで遡及しながら解明しようとした点は、本論文の特筆すべき所と言えよう。その結果、大平学校を中心としながらもそれだけに留まらない厚みのある研究となった。

現在、日中国交回復 40 周年を迎え、日中関係は様々な軋轢を抱えている。その故にこそ日中間の教育文化交流の歴史を顧みること、新しい日中関係を如何に構築すべきかを再検討する必要がある。本研究は、こうした課題の解決にとって有効な事例を提出しようとした意欲的な研究である。

### **(3) 人間形成および生涯学習としての外国語教育の意義の検証**

言語は人をつくり、文化をつくり、社会をつくる。その意味で、単なるコミュニケーション手段としてではなく、人間形成をもたらす教育の一環として外国語教育を捉える必要がある。本論では、大平学校において人間形成としての外国語教育がなされていたことを検証し、それによって言語学習の持つ社会的・文化的意味を問い直すことに挑戦している。言語教育実践と学習者の教育体験を社会状況の中で構造的に捉えようとした本研究は、日本語教育研究や言語教育研究にとっても、新しい知見や視座を提供しえたと考えられる。

また、大平学校での日本語教師の学びは、学校教育終了後の継続教育、すなわち生涯学習としての外国語教育でもあった。そもそも生涯学習の根底には、現状の変革という理念があり、現在の閉塞状況を打破して社会を改革し、個人の人生をよりよいものにしたいという一人一人の思いから学習活動が出発している。

本論文のケースに即していえば、中国の文化大革命の荒波の中で青春時代を翻弄され、改革開放期になって大平学校においてセカンドチャンスを与えられ、文革で失った集約的な学習機会を取り戻すことになった中国人研修生たちは、まさしく現状打破のための真摯な生涯学習を展開したことが本論からは読みとれる。また、大平学校で教鞭をとった日本人講師たちにおいても、ある者は中国語を新たに学び、日本帰国後に中国人留学生の世話をするなど、その後も日中教育文化交流活動を担う中核的な存在として活躍していった。

本論では、生涯学習として外国語を学ぶことが人生に大きな影響を与えることを、実証的な事例によって明らかにしている。

このように、大平学校の教育実践が時代の中で、人間形成的な意義と生涯学習的な意味を持ったことを解明した点も、本研究のユニークな特徴である。

#### **(4) 異文化間交流において学び合う共同体が形成されたことの指摘**

大平学校は、日中友好という特殊な時代背景及び国家政策の中で展開された教育実践であるが、日中の異文化間交流の中で、双方の文化が共生する「学び合う共同体」が形成されたことを著者は論じている。こうした教育実践が可能となった背景として、日中戦争の甚大な被害と戦争への日本人側の反省のあったこと、そして日中相互理解を願う双方の真摯な思いがあることを、一人一人の語りから究明している点は、特筆すべきであろう。

さらに、優秀な研究者であると同時に情熱ある教師でもあった佐治圭三という日本人講師が、キーパーソンとしての重要な役割を果たしていることも、本論文は明らかにしており、教育実践における優秀な教員の存在の大切さを再認識させてくれる。

また、大平学校が養成した中国人日本語教師が、異文化理解を若い世代に伝え、こうした若い第3世代が、日本留学期間中に、異文化環境にある在日中国人児童への学習支援活動を行っていることを、「補論」で考察している点も、大平学校の「学び合う共同体」の成果として、注目に値しよう。

本論文には以上のような優れた研究成果が認められる一方で、若干の課題が残されている。今後の研究の発展を期待し、以下のような要望を記しておきたい。

第1は、インタビューといった研究の手法に関わる課題である。本研究は、現在から30年前を振り返るといったインタビュー（半構造化面接）を通して、関係者それぞれの人生に対する大平学校の影響、その後の進路などを、聞き取り、分析・検討している。しかし、本論のインタビュー対象者の多くは、大平学校で学ぶことで社会的地位を得た者、あるいは

は日中関係に積極的に関わってきた者である。そのため、大平学校のポジティブな側面がおのずと分析の中心となっている点にどうしても限界がある。今後、さらに多方面から資料を収集し、大平学校の実践の課題点や修了生全体をみた場合に指摘される問題点などに関しても、多角的な視点から検証する必要がある。

第 2 に、中国が抱える外国語教育の政策課題や言語政策の問題点に、どのように対峙すべきか、といった総合的な視座が弱い点が指摘できる。

具体的には、「国家利益」の追求や実利主義的な日本語教育から、個々の学習者の人間的成長へと結びつく教育理念への転換、あるいは大平学校で日本語教育界のエリートとして育てられた日本語教員たちが、大学の大衆化時代において、どういった日本語教育を実践し人材を育てていくのか、といった点からの分析が、今後さらに望まれる。

第 3 に、大平学校は、両国政府による国家政策の中で実施された教育文化事業であるが、日中関係の冷却化からの回復が待たれる現在、日中両政府と関係者が成功に導いた大平学校の実践を今後どのように批判的かつ正当に評価してゆくのかという課題である。

現在、日中友好のための諸施策が優先的に展開された時代は終結し、新たな段階を迎えている。こうした時代状況の下で、大平学校の修了生である教え子(第 2 世代)、そしてその教え子(第 3 世代)がどういった日本語・日本研究の専門人材や、あるいは日本とより良い関係を結ぶことのできる日本語学習者を養成していくのか、そこに大平学校の真価が問われているとも言える。今後の継続的研究に期待したい。

以上のような課題を残しながらも、大平学校を事例とした戦後日中教育文化交流史に関して、従来の研究ではなし得なかった多くの第 1 次資料を博捜し、教育学的な考察を試みた本論文は、研究に新たな知見や視座を提供しており、高く評価すべきであろう。

以上の諸点から総合的に判断して、審査員全員一致して、本論文が「博士(教育学)」の授与に値するものであるという結論に達したので、ここに報告する。